

〔資料〕

英国の医療における WBL(Work Based Learning) の実際 (第1報)

—新しい NHS と WBL の概念—

服部 律子¹⁾ 小田 和美²⁾ 両羽 美穂子³⁾

Work Based Learning for Health Care in UK Part 1:

New NHS and The Concept of WBL

Ritsuko Hattori¹⁾, Kazumi Oda²⁾, and Mihoko Ryoha³⁾

I. はじめに

英国の医療制度は、NHS (National Health Service) により運営されている。NHS は国民の税金を財源とする制度で、利用者負担は原則無料であり、ヘルスケアが必要なときに誰でも利用できることやプライマリケアを重視する包括的な医療制度を特徴としている。英国のこのような医療制度は、かつて「ゆりかごから墓場まで」のスローガンで高度福祉国家のモデルとして名を馳せた。しかし英国の経済が低迷する中、医療費も対 GDP 比で低く抑えられており、医療の荒廃が進んでしまった¹⁻³⁾。

今 NHS は新たな改革の只中にある。ブレア政権での NHS 改革のひとつに「医療の質向上」の重要性が強調されている。医療の質の向上において不可欠なのが、医療従事者の質的向上であり、賃金や労働時間などの労働条件の改善とともに、研修、上位の資格取得などの試みによる、レベルアップである。

英国での医療従事者の生涯学習は、医療政策上の課題なのである。NHS という国家単位での組織的な取り組みとして、NHS 職員の生涯学習は位置づけられているが、今回特に看護職の生涯学習という視点で、英国の現状を視察する機会を得た。Lifelong learning は英国の医療職者養成の骨格となる考え方であり、本学が目指す看護職の生涯学習の拠点という理念と通じるものがある。今回はまず、英国における看護職の生涯学習の実際を学

ぶことにより、岐阜県での看護職の生涯学習に関して活用できる示唆を得るために、NHS の生涯学習担当者を訪れ現状を視察した。

第1報の本稿では、まず NHS の変遷から現在の NHS 改革の背景を述べ、医療従事者の生涯学習が NHS の施策にどのように位置づけられるかを確認し、看護職、特にプライマリケアの現場での生涯学習の現状について述べる。

II. 新しい NHS

1. NHS の変遷

NHS は 1948 年に成立した。英国が理想とする福祉国家の構築にむけて、社会保障制度の基盤をなす利用時無料の医療制度である。過去の労働党政権により効率より公正を重視する政策がとられ、英国経済全体が低迷してしまい、医療も荒廃が進んだ。1979 年にサッチャー率いる保守党政権が、英国経済の建て直しのために、公正を犠牲にしてでも効率を高めるべきだ、という改革を国有鉄道、電気、ガスなど次々に行なっていった。しかし社会保障の理想の制度である NHS 医療については、民営化に関して国民の同意を得ることが難しく、NHS 内部に市場競争を持ち込む形をとった。1990 年からのサッチャー政権での NHS 改革により、医療費を低く抑えたままで、医療に競争原理を持ち込み「効率」を求め

1) 岐阜県立看護大学 育成期看護学講座 Nursing in Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学講座 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 機能看護学講座 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

れば、医療の質が上がる、という期待のうちに NHS 改革が進められたが、その結果かえって、医師の海外流出、待ち時間の長期化など医療現場はさらに荒廃してしまった⁴⁾。

ブレア首相の労働党が政権に返り咲いて、新たな NHS 改革が始まったのが 1997 年からである。ブレアの NHS 改革の 3 つの特徴は、①目標の設定でありこれは国として提供する医療サービスのスタンダードを示すものである。特に EBM (evidence-based medicine) が重視され、効果のある治療に費用を費やすことで医療の質向上を図る。②クリニカルガバナンス (Clinical governance) といわれる政策の方針であり、これは臨床現場に近いところに権限委譲するとともに、医療の質向上について臨床現場に統治責任をおく系統的アプローチである。プライマリケアについては、PCT (primary care trust) をつくり、医師・看護師・福祉専門家など NHS 職員全体で、その地域における医療福祉計画を立て、予算を管理運営し、医療の質の保証、向上を実行していく。③結果と成果の評価である。国の医療サービスのスタンダードは NSF (National Service Framework) で提示された達成すべき目標値についてその結果はどうか、評価と説明責任が求められているのである。また各病院や PCT ごとに業績 (Performance Assessment Framework) を発表し、成果主義・評価の重視を求めている。

2. 新しい NHS の改革

さらにブレア首相は 2000 年に「The NHS Plan」を発表し、医療費を増額し、医療の質を保証し公正を図ることを重視した⁵⁾。医療費は 1997 年では対 GDP 比で 6.7% の水準であったものを 2005 年には 10% にまで増やす計画である。多額の投資をして様々な医療改革が進められているのであるが、21 世紀に入り、特に患者中心の医療が求められるようになり、英国の伝統的な第一次医療 (プライマリケア) の充実が強調されている。具体的な数値目標として、医師 1 万人、看護師 2 万人を増やすことをはじめ、ベッドや医療機器を増設すること、待機者リストを減らすことなど 2005 年までの数値目標を示した。

待機者リスト問題は、英国人にとって深刻な問題であるが、それに加えて医療従事者の不足や士気の低下は医

療現場をさらに荒廃させている。人口当たりの医師数がヨーロッパ諸国に比べて少ないのに加え、養成が追いつかず、さらに劣悪な待遇のために多くの医師や看護師が、海外に流出しているのである。医師・看護師を海外から「輸入」し、急場をしのいでいるのであるが、NHS 改革では医療従事者の養成数を増やすとともに、医師では卒業後 3 年間の研修が義務付けられるなど、卒業後の研修や現職の人たちへの研修の充実をはかっている。

Lifelong learning や WBL (Work Based Learning) という概念と取り組みは、このような NHS 改革という国家プロジェクトの一環として、多額の予算を投入された重要な意味をもつのである。

Ⅲ. NHS とプライマリケア

今年度 (平成 16 年度) の視察では、NHS はまさに改革の真っ只中にあり、現場では成果主義に基づいて厳しい評価を求められていた。今回の視察は、特にプライマリケアの現場を主として、GP や看護職の生涯学習の現状を学んだ。

1. プライマリケアトラスト

前述の NHS Plan において、英国の医療の中心にプライマリケアをおく体制が改めて強調された。英国が伝統としている予防的、包括的、全人的な医療を行なうためには、地域の診療所を基盤とした医療サービスを行なう、プライマリケアトラスト (PCT primary care trust) が、各地域のニーズに応じて独自の裁量で運営を行なえるようになった。その他の新しい取り組みとして、電話やインターネットを用いた「NHS Direct」という医療情報提供サービスや、救急での待ち時間を減らすために「Walk-in Center」と呼ばれる夜間休日診療所の整備などがあげられる⁶⁾。

PCT は約 20 の診療所をもつ人口 5~25 万の地域を単位としている。2000 年から改組された、プライマリケアグループの発展した形態であり、まだ各地域によってサービスの提供内容も差があるが、各トラストは目標に対する成果により業績が発表され、ランク付けがされているのである。PCT では医療とリハビリ、訪問看護、ソーシャルサービスの統合がなされ、より地域住民に密接したケアの提供が可能になっている。

英国のプライマリケアは、「病院以外で人々が受ける

医療」を意味している。医療を受けたい利用者は、救急の場合を除き、まず地域の診療所に出向きそこで GP (General Practitioner) から必要な医療を受ける。専門医への紹介が必要な場合には、他の病院や専門施設を紹介するのである。GP は英国のプライマリケアを担う「家庭医」であり、PCT と契約を結び、診療所では複数の GP がグループ診療をしていることが多い。NHS 医療を受けるためには、住民は必ず地域の GP に登録しなければならないので、専門的な治療を受けたい場合でも、GP の紹介がなければ長期間待機などかなり手間取ることになる⁷⁾。

2. プライマリケアと看護職の役割

新しい NHS では、プライマリケアの場での看護職の役割も強化されている。日本では病院がプライマリ医療を担うことが多いので、訪問看護や保健指導など病院の看護職も同様に地域に向けたプライマリケアを実施している。しかし英国では、入院していない人がプライマリケアの対象であるので、地域での看護も訪問を主とする District Nurse、6 歳未満の子どもと家族を対象とする Health Visitor、周産期のケアを専門とする助産師、学校での児童の健康管理を行なう School Nurse、その他糖尿病専門看護師、子どもの発達障害の専門看護師、精神保健の専門看護師など、多くの専門分化した看護職がそれぞれの役割を地域で果たしている。PCT では看護職は予防からリハビリ、介護まで地域の保健福祉全体に関わるので、今後の NHS の発展に大きな期待を寄せられている。助産師や看護師のリーダーシップを強調し、疾病の予防、健康増進のための他職種や他施設との連携を図り、救急時にも対応できる看護職の養成を目指している。またプライマリ医療における看護職の職権の拡大も実施されている。従来医師が行っていた、診療行為の一部や特定の疾患に対する処方権を専門の資格をもった看護職に委譲するのである。これにより看護職が、地域で患者および家族中心の一貫したケアができる可能性は広がると考えられる⁸⁾。

IV. 新しい NHS と WBL

1. 生涯学習の重要性

新しい NHS では職員の質向上のための現職教育に多くの予算が割かれていることを述べた。看護職の大幅

増員を目標とするこれからの NHS についても、その戦略として 3 つの「recruit 看護職の養成と海外からの輸入」、「retain 専門職としてのキャリア開発、現職教育」、「return 潜在看護職の復帰、家庭と仕事の両立への支援」を掲げているが、その中でももっとも重視されているのが、retain (キャリア開発) である⁹⁾。このキャリア開発のために英国では Lifelong learning の考え方が重視されている。学校教育での基礎教育はあくまでも卒業後に自ら学べる能力をつけるものであるという。視察先の Hillington PCT の Life long learning の考え方を表 1 に示した。職場で学ぶことに意義と、長期短期、公式非公式に関わらず、学び続けることを推奨している。また個人の学習は PCT が予算的にサポートし、個々人に学習の計画をたて、たとえば働きながら大学院で学ぶコースに PCT が派遣している。

表 1 Lifelong Learning

- 専門職としての成長、その人個人の成長のために長期短期、フォーマルインフォーマルな学習の機会を継続して保障
- 現場で学ぶことの価値を評価する
- 実践の振り返り見直し
- 仲間と支えあい学ぶ・・・peer support, peer review
- 学習のプロジェクト
- Action Learning, Action Research
- 個別の学習計画の契約

2. WBL 一日常業務から学ぶということ

WBL は日常の業務から学ぶことを意味するが、これは従来、臨床現場で行なわれていた、自己学習、グループカンファレンスや勉強会も含むが、より組織的な試みであり、職域を超えた職員が学びあうことにより、より利用者中心に発展するということに特徴がある。意図的な WBL とは、①職場の課題を意図的に学習に結びつけ、理論的な裏付けを与える。②大学などの教育機関と連携して、職場の学びを教育課程のひとつとして位置づける。③学習者に協力的に関わるだけでなく、支持的 (supportive) に関わることがあげられている。さらにこれらの学習の積み重ねが、専門看護師の資格につながるように配慮されている。Hillington PCT の WBL の概念モデルを図 1 に表した。自ら学ぶことを基盤に、臨床能力を高め、大学などの教育機関と連携して組織的に WBL を実践していこうとするものである。

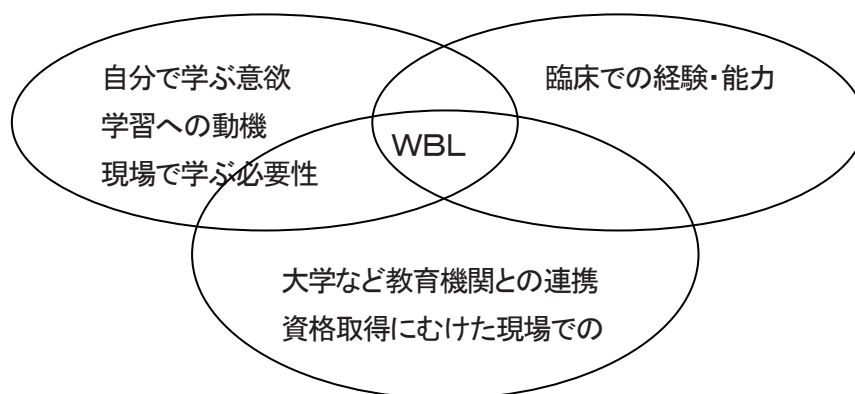


図1 WBLの概念モデル

V. プライマリケアとWBL

1. WBLから学んだ地域看護師の例

視察中にロンドンのPCTのスタッフより、地域で働く看護師がWBLによって、自分のキャリアを発展させていった例が紹介された。彼女はまず、地域で終末期ケアを行うパートタイムの看護師であり、大学で緩和ケアのコースを勉強していた。このコースでは、ガン病棟での看護師経験とともに地域のホスピスでの経験も積んでいた。コース終了後は薦められて病院で働き、パーキンソン病の専門看護師が彼女のmentor（指導者）となり、パーキンソン病について学ぶ機会を得た。さらに6年後、大学で専門看護師の学士号を取る事ができた。この学士課程はWBLによるカリキュラムであり、病院で働きながらパートタイムで大学で学び、臨床での学習が重視されていた。特にパーキンソン病の患者から学ぶことが多く、これは、単に学問としての学びよりも多くを得る事ができた。このカリキュラムでは認知症についても学ぶ事ができ、これは、パーキンソン病のケアに当たるときに大変有効であった。その後プライマリケアの組織再編成が行われ、新たにPCTが結成され、そこで地域でのパーキンソン病の専門看護師となる事ができた。PCTではパーキンソン病についてあらたな知識を習得する必要もあり、神経内科の医師や地域の病院看護師たちとチームを組み、学習した。地域でパーキンソン病専門看護師として働くことは、患者中心のケアのために他の専門職と新たな人間関係を構築することであった。専門看護師は特定の疾患について処方する事ができる。この処

方についても地域のGP（家庭医）や病院の神経内科医と連携をもち、処方がスムーズに行われるようになった。この専門看護師は、常にPCTや地域の病院の他の専門職と学習会をもちながら、パーキンソン病の患者と家族のために働いている。

このように大学の学位取得のようなacademicなカリキュラムから、職場でのinformalな学習会までWBLの考え方が適応されているのである。

2. 新しいNHSでのWBLの効用

NHSではWBLの効用を以下のように挙げている¹⁰⁾。

- 1) NHSを利用する患者に最善の医療を提供するため、WBLは高等教育機関との連携を積極的に行うことができる。
- 2) 臨床現場でのformal・informalな関わりを促進させることができる。
- 3) 学ぶことにより理論的な基盤をつくる。
- 4) 個別の学習やグループでの学習を支援する。
- 5) 個別の学習を組織的な学習システムに発展させる。
- 6) WBLにより学習への動機が高まり、批判的思考、反省的思考ができる。
- 7) NHS改革に関する理解の助けになる。

VI. まとめ

今回、英国における日常の業務から学ぶWBLという実際に視察する機会を得た。日々の実践から学ぶということ自体、特に新しい手法があるわけではないが、医療の質向上のための組織的な学習体制ということでは、わが国にある医療の問題と共通する点もあり、英国の試み

から学ぶことは大きいと考える。専門職としてのキャリア発達を組織的に行なう WBL は、職業と人間発達を全人的に捉え、英国が誇るプライマリケアの本質から改善していこうとする取り組みである。職場で学ぶことのすべてが WBL であるが、これは職業人としての成長に関わる哲学的な課題である、という NHS の看護職の言葉が印象に残っている。

本学でも看護職の生涯学習の支援は、大学の理念のひとつとして今後も取り組まれていくものであるが、英国とはシステムは異なっている、看護職の生涯学習の意義は本質的に変わることはない。今後英国の取り組みから学び、本県の看護職の生涯学習の発展に貢献していくことが必要であると考えられた。

文献

- 1) 近藤克明：「医療費抑制の時代」を超えて－英国の医療・福祉改革，医学書院，2004.
- 2) 丸光恵：クリニカルガバナンスがもつ意味，インターナショナルナーシングレビュー，24(4)；26-29，2001.
- 3) 斉藤康洋：英国のプライマリケア（上）－新しい NHS の目指すもの，日本医事新報，4187；103-107，2004.
- 4) 前掲 1)
- 5) The NHS Plan, 2006-01-10, <http://www.nhs.uk/nhsplan/>
- 6) 岡本玲子，中山貴美子，塩見美抄，他：英国に学ぶ公衆衛生の原点，保健師ジャーナル，61(7)；637-643.
- 7) 前掲 3)
- 8) The NHS Plan — an action guide for nurses midwives and health visitors, 2006-01-10, <http://www.dh.gov.uk/assetRoot/04/05/80/76/04058076.pdf>
- 9) 前掲 8)
- 10) Jonathan Burton, Neil Jackson : Work Based Learning in Primary Care ; 10-11, 2003.

(受稿日 平成 18 年 1 月 11 日)

(採用日 平成 18 年 2 月 20 日)